

平成 23 年度 長野県における環境協働活動調査業務

1. 業務内容

長野県における協働活動の優良事例を 2 事例程度収集し、代表的な環境協働活動としてどのような事業が今展開されているのか、その背景と現在までの活動内容などのプロセスや協働の運営体制等を把握し、今後協働活動を推進するための課題の把握を行うとともに、それらの活動が ESD の視点を有しているものかどうかを調査し、これらを事例として協働や ESD の普及を進め、その関係者と連携し、新たな人材の育成を促すことを目的に実施する。

今回、本事業の目的として調査を行った団体と事例は以下の通りである。

① NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター

【あんじゃね自然学校人材育成プログラム】

長野県下伊那郡泰阜村に事業所を構え、人口 1900 人程度の小規模集落である泰阜村で、16 人の職員・スタッフを擁して活動する村内でも有数の事業者である NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター。毎年小中学校の夏季及び冬季長期休暇に開催する「信州山賊キャンプ」には全国各地から 1000 人を超える子ども達の参加者と、大学生を中心に 300 人を超えるスタッフが集まってくる。

また、「暮らしの学校いだらぼっち」事業では年間を通して 15 人～20 人の子ども達が、泰阜村での山村留学を体験している。

② NPO 法人 やまぼうし自然学校

【森でモリモリ遊び隊】

長野県上田市菅平高原に事業所を構え、菅平のフィールドをはじめとして長野県内各地で自然体験に関する様々な活動を展開している NPO 法人やまぼうし自然学校。本事業は主に子どもを対象としたプログラムで、年間を通して活動を行っている。やまぼうし自然学校は ESD-J の正会員としても登録をしており、環境協働活動への取り組みを積極的に推進している団体である。

2. 事例 1：あんじゃね自然学校（支援学校）人材育成プログラム

① 活動の社会的背景

グリーンウッド自然体験教育センター（以下グリーンウッドと記載）が主催している、都市部で生活する子ども達を参加対象とした「暮らしの学校いだらぼっち」や「信州山賊キャンプ」事業が軌道に乗り始めた 2001 年頃、

泰阜村村内の子ども達の自然体験不足を危惧する声が少なからず聞こえてきた。

首都圏をはじめとして全国各地から泰阜村へ、自然体験活動をするために多くの子ども達が集い、村の協力も得ながら実りある自然体験プログラムを展開していく中で、地元である泰阜村村内の子ども達が意外にも自然体験に触れる機会が少ない事実が浮かび上がってきた。その背景には、泰阜村の集落構成にその一因があった。泰阜村は前述の通り人口1900人程、村の広さは、東西10.8km、南北16.0km、総面積64.5km²で山林が86%を占めており、その広域な村の敷地内に19の集落が山間に点在している。各集落に小学生は数人いればよいほうであり、まったくいない集落もある。授業が終わって下校してから友達同士で自然の中へ連れだって遊びに行くことが難しい現実があった。

集落には自然の中で生活している「体現者」とも呼べるおじいまやおばあま(村の大人達で比較的年配の方々を泰阜村でこう呼んでいる)がおり、子ども達への学習機会の提供は容易に行えるはずの環境があったが、子どもの数の減少と、テレビやインターネットといった屋内で行う活動の普及により、その機会が失われつつあった。

② 立ち上げの経緯、きっかけ

こうした泰阜村での社会的背景を受けて、村内のおじいま・おばあまが中心となって子ども達の先生になり、自然体験活動の提供をしていく計画が生まれ、2002年4月に官民協働事業の先駆けとして、「伊那谷あんじゃね自然学校」として開校された。

「あんじゃね」とはこの地方の方言で「案ずることはない。大丈夫」という意味をもっており、泰阜村の厳しい自然環境の中で生きてきた先人達の知恵と経験を、今、そしてこれからを生きる子ども達へ受け継いでいくことで、子どもからお年寄りまで安心して暮らしていける村づくりをしていきたいという想いが込められている。

泰阜村が「暮らしの学校だいだらぼっち」の敷地内に校舎を建設し、企画や運営・プログラムの実践について主にグリーンウッドが担う形でのスタートとなった。

そこには村内に生活する子ども達が自然体験に関わってもらいたいという想いが、村の大人達に共通して内在していたと考えられる。役場とグリーンウッド、そして地域の方々が連携をしていく素地があった。村をあげて推進する事業であった。

③ 活動内容（活動の目的、理念、計画など含む）とその変遷

【目的】

活動の最大の目的については、前述の通り「あんじゃね」な村づくりと、泰阜村に暮らす村民がこれまで受け継がれてきた先人達の知恵と経験を現在の子ども達に伝え、地域における日常生活の中で人材育成を行っていくことにある。

【理念】

高度経済成長期「都市に追いつけ、追い越せ」といった考え方が地方でも主流であった時代、泰阜村においてもこの意識は浸透していた。都市部への人材流出が泰阜村でも増え、子ども達が村内から少なくなりつつあった中、「学校週休2日制」の実施が始まった。土曜日の過ごし方が議論されていく際、何をすればよいのか、子ども達へ何を伝えれば良いのかを具体的に実行に移すことに難航している中で、泰阜村では長年培ってきた「地域住民によって地域の教育をつくりあげる気風」により、グリーンウッドでの自然体験活動を通して「土曜学校」の実施が始まった。

そこにある理念は「これまで泰阜村で生活をしてきた住民が大事にしてきた生活文化を、現在の大人達が力を合わせて子ども達へ伝えていこう」というものであり、そこにはゆるやかに力強く地域教育を考えていく泰阜村の気風が存在している。

伝統的な村の気風が「あんじゃね自然学校」の理念の礎となった。（以下「自然学校」と記載する）

【計画】

当初は15人のメンバーで会議体が構成された。その構成員は、小中学校教員、保育士、それぞれのPTA、役場職員、青年団員、NPO職員、農業従事者、猟師、村議会議員、陶芸家、炭焼き職人、Iターン者など、職種も様々で年代も20代～80代まで幅広いものであった。この会議体を「あんじゃね支援学校」と呼んでいる。（以下支援学校と記載する）

年に3～4回の会議を開催し、時には学術経験者を招いて講習会を行う事もあったが、構成員は毎回欠席することなくほぼ100%に近い参加で会議体が進められた。

「支援学校」の名づけ親は泰阜村村長、また歴代の座長に教育長、村議会議長が名をつらね、当初から村をあげて計画を進めていく取り組みという位置づけであった。

【活動内容】

泰阜村が長年培ってきた自然環境や生活習慣等を子ども達へ、「何を、どのように、どうやって、どんな場面で」伝えていけば良いか、について活発な意見交換が交わされ、様々な問題・課題が見えてくる中、その解決に向けた議論が深まっていき、村の大人達の意識に「子ども達へ伝えたいことがある」という強い気持ち呼び起こしていった。

「支援学校」での議論・検討・提案を踏まえて「自然学校」で実施されていった活動は多数あるが、その中でいくつかの事例について、以下の通り紹介する。

●野外保育/森のようちえん

近年ではその存在が全国的にも有名になり、各地で野外保育を行う園が増えてきている。森のようちえん活動とは、幼少期に自然の中で身体的感覚を育む保育方法であり、自然と共に生きていく素養を幼少期の子ども達へ伝えていく効果的な活動である。

泰阜村は自然環境が豊かで、活動場所に恵まれていたが、現実には当時の村の保育園・幼稚園に通う園児達は、遊具等の設備が整っているからという理由で隣村の公園へ遠足に行くという実態もあったことから、自然学校での取り組みとして開始された。

当初、支援学校のメンバーである保育士は難色を示していた。それは野外における危険性や保護者への対応が発生するという理由であった。支援学校ではまず野外保育の先進地から講師を招き講習を受けた。その後、村内の保育士を連れて野外保育を行っている地域へ現地研修を行い、園児の保護者へも保育士と共に支援学校のメンバーが丁寧に粘り強く説明を行っていく中で現在では月に1回程度のペースで、グリーンウッズのスタッフが園に出向いていき、保育士の方々と協力して、子ども達を山の中や森、川へ連れて行っている。

この取り組みでは野外に連れていく子ども達の反応は正直であった。野外で園児達ははじめのうちは慣れなくて戸惑っている子どももいたが、すぐに元気よく駆け回っている。やはり子ども達は野外で遊ぶことが必要であるということの証明であった。

また、それ以上に保育士の方々が勉強になる事が多かったと言っており、子ども達のみならず大人達（この場合は特に保育士）双方に相乗効果がある取り組みであった。保護者からの評判も上々であり、この活動に関わる全ての村民にとっての「人材育成に繋がった」と言える事例である。

●環境美化ボランティア

最近の活動事例になるが、泰阜中学校の生徒を天竜川にカヌーで連れ出して川の活動を体験してもらおうという計画が支援学校で提案された。しかし天竜川は過去に水害も発生しており、リスクが高いという意見もあった。そのような意見もある中で、天竜川の持つ教育効果を中学生に伝えていきたいという想いで、川の活動について方法や技術、安全管理に精通しているグリーンウOODのスタッフと、中学校の職員、そして支援学校のメンバーが協働してこの計画は実現する予定であったが、取り組みの初年度（2010年）については、天候の影響によりカヌー体験は実現できない結果となった。しかし、この取り組みはこの時点で終わりを迎えることがなく、その後中学校との協議の中で、中学校生徒会と連携しながら川のゴミ拾いを行う環境美化ボランティア活動の実施を行う事となった。この活動には多くの中学生とその保護者が参加をする結果となった。また、ゴミ拾いをした中学生のうち2名が、環境活動の発表をする子どもフォーラム（沖縄で開催された）に参加する事になった。

この取り組みに参加した中学生達にとっては活動そのものが「体験」だけでなく「貢献」につながり、難しい勉強をしなくとも「環境教育の実践例」として身に染みて学ぶことができのだと考えられる。

2011年にはゴミ拾いだけでなくカヌー活動も実現し、そこで養われた意識は被災地支援の活動へも広がりを見せている。支援学校の理念に沿った活動を行ったことが、結果的に子ども達の環境への意識を高め、社会貢献活動に携わるきっかけを作ったと言える。

●あんじゃねの森計画

泰阜村の中に唐笠という集落がある。そこに現在は廃校となった泰阜北小学校の旧学校林があった。薪ストーブが主流だった時代には、燃料を調達する林として恒常的に人が入っており、子ども達の遊び場でもあったのであるが、現在は放置されていた。

そこに自然学校の体験活動プログラムとして、「ツリーハウス作り」を行う計画を提案し、子ども達の元気な声を森林に取り戻そうという取り組みであった。

村の製材所や林業士、プロのツリーハウスビルダー、グリーンウOODのスタッフ、そして村の子ども達が4回のワークショップを行った後、建設することとなった。

高さ5メートル、床面積6畳、窓やドアがあり、まさに「木の上の家」として完成した。

この活動に関わった年配の村のメンバーは、自身が幼少の頃にこの学校林で体験した経験談を子ども達に話をしてくれた。それは、当時薪の調達林としてこの学校林は使用されていたが、生活における仕事として、小学生が薪を集めにいく事があった。その際には、要領を知っている上級生が下級生に教えながら、子ども達同士で助け合って作業していたという話であった。

また、山師であったメンバーは学校林の周りで出沒した熊についての話を、熊の危険性やその対応策について、体験を通して子ども達へ伝えてくれた。

ツリーハウスを作るという過程で、子ども達は村の大人達から、自分達が住んでいる地域にある山林について多くを学び、また助け合う事の重要性を知ることができた。

そして現在、この旧学校林は「あんじゃねの森」と呼ばれるようになり、子ども達の大切な遊び場となっている。この森で活動していく事を通して、森林の保全のみならず、村の歴史と森林が深く関わっている事を子ども達は学ぶことができる取り組みであった。現在この「あんじゃねの森」は子ども達の遊び場として活用されている。

●「炭スタンド」

自然学校の取り組みでユニークな活動として紹介する。一言で言うと「物々交換スタンド」である。支援学校のメンバーに炭焼き職人が参加していることは前述の通りであるが、彼の指導のもと、子ども達が炭焼きについて体験しながらその方法を学び、焼きあがった炭と米などを交換するシステムである。

現在の交換レートは炭 10 キログラムに対して米 1 キログラムとなっている。高齢化にともない、炭焼きをする村民が減っている中、子ども達が焼いてくれる炭は村民のために大変役にたっている。子ども達が村の伝統的な炭焼きを受け継いでいく事は、村の慣習を学び、村での大切な生活における仕事を担うと同時に、化石燃料に頼らない燃料の活用を実践していると言えるのではないだろうか。この活動も人材教育を通して環境配慮につながる取り組みである。

④ 運営体制の現状

前述の通り 15 人のメンバーから始まった「支援学校」は、グリーンウッドの「暮らしの学校だいだらぼっち」に設置された「自然学校」が実施する自然体験プログラムについてその検討・企画・運営を担ってきた。プログラムが増えていくにつれて、この活動は泰阜村の多くの村民を巻き込んで、村民

の大人達の多くが子ども達の良き先生として加わってくれている。メンバーは業種や役職、年齢といった壁をこえ、それぞれが持っている知識・経験を会議に提案してきている。現在では中学生や子ども達、近隣の高校生や飯田市の大学生にも参加を呼び掛けて、運営体制はより一層幅広い人材で構成されている。

そういった意味で、この活動の運営体制は「泰阜村で地域教育を考える」という意識を持つ全ての方が活動を支えるメンバーとして関わっており、現状の運営については、泰阜村の村民全てがメンバーになりつつあるといえるかもしれない。

⑤ 活動等を支援した地域資源（人材・組織など）

【人材】

すでに記載してきた通りであるが、活動が始まった当初から泰阜村における以下の方々が構成員として支援してきた。

- ・小中学校教員
- ・保育園の保育士
- ・小中学校・保育園のPTAに参加する保護者
- ・泰阜村役場職員
- ・泰阜村村議会議員
- ・泰阜村青年団員
- ・グリーンウッド自然体験教育センタースタッフ
- ・農業従事者
- ・猟師
- ・炭焼き職人
- ・陶芸家
- ・Iターンで泰阜村に来た住民

※また、それぞれの活動内容によって都度村民の中から特技を持っている大人達（おじいまやおばあま）が指導者として参加。前述の通り、現在では泰阜村の村民多数が何かしらの支援に関わっており、また近隣の高校・大学生達もボランティアスタッフとして自然学校の活動を支援している。

【組織】

- ・泰阜村の小中学校
- ・泰阜村の保育園
- ・PTA

- ・泰阜村役場
- ・泰阜村村議会
- ・泰阜村青年団
- ・グリーンウッド自然体験教育センター
- ・文部科学省（2007年度から2年間助成金にて支援）
- ・トヨタ財団（2009年度から2年間助成金にて支援）
- ・長野県（2011年度助成金にて支援）

※組織という形ではないかもしれないが、村内における農林畜産業の従事者をはじめとして現在は多種多様な立場・職種の方々がこの活動に支援を行っている。

⑥ 活動を推進するポイント

最大のポイントとしては「地域住民によって地域の教育を作り上げる」という泰阜村に根付いている気風。地域の教育の在り方を、地域住民が考え、行動していくこれまで連綿と村が培ってきた歴史にその推進力があつたと言える。

加えて「グリーンウッド」という、当初は「ヨソモノの集まり」と言われた若者たちの集まりから始まった団体が、時を重ね、その活動や事業展開を進めていく中で、確実にこの地域における自然体験を通じた教育とそれに付随する産業効果を作り上げてきた実績が、グリーンウッドが主体となって推進してきたこの活動におけるポイントとしてあげられる。

さらに「このままではいけない。何とかしたい」という、泰阜村を愛する多くの村民の皆様、想いを持って行動する方々が、立場や職種を越えて協働した事が大きな推進力となった。

⑦ 今後の改善課題

「支援学校」が「自然学校」の体験活動について議論・討論・検討をして提案していくという形で進められてきてもうすぐ10年の月日が過ぎようとしている。

泰阜村で連綿と受け継がれている「支え合い・協働し・共に創る」という村における地域教育についての素晴らしい仕組みは、今でも現在進行形で進められている。

今後の改善課題としては「支援学校」が常に中心となり、グリーンウッドが主体となって泰阜村の自然体験活動を通じた教育プログラムの提案を行っていくのではなく、村民全体が協議会や共同体のような形でチームを組み、泰阜村の地域教育を考え、議論・検討をして創り上げていく事が必要と考え

られる。

「自然学校」における人材育成プログラムを、地域の協働で進めていく事が、これまで培ってきた泰阜村の気風にも合致する事と、今後に向かったより幅広い活動へのステップアップとなる力になっていくと考えられるからである。

⑧ ESD としての分析

ESD は、「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development) の略称です。

「わが国における「ESD の 10 年」実施計画」では、ESD を「一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革するための教育」と定義されています。

持続可能な開発を通じて全ての人々が安心して暮らせる未来を実現するには、わたしたち一人ひとりが、互いに協力し合いながら、さまざまな課題に力を合わせて取り組んでいくことが必要です。そうした未来へ向けた取組みに必要な力や考え方を人々が学び育むこと、それが「持続可能な開発のための教育＝ESD (イー・エス・ディー)」なのです。(※認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議 (ESD-J) のホームページから引用)

上記定義に基づいて、今回調査を行った「グリーンウッド」が中心となってその活動を推進してきた「あんじゃね自然学校人材育成プログラム」について、ESD-J が提唱する「ESD を通して育みたいもの」の 3 項目にてらしあわせつつ記載していく。

【ESD でつちかいたい「価値観」】

●人間の尊厳はかけがえない

泰阜村の「自然学校」におけるプログラムは、村で暮らす子ども達を、村の大人達が大事に想い、また子ども達は村の大人達を「尊敬し敬う」気持ちが生まれている。この関係が村の気風・習慣に根付いており、人間の尊厳について、常に活動へ関わるメンバー全員が意識を持って行動することが実現されている。

●私たちには社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある

地域住民によって地域の教育を作り上げることが、このプログラムのポイントであるが、そこには村という単位ではあるが、社会的・経済的に不公平が起こらないように、村民がお互いに協働して活動を進めていく風習が生まれていく事で、それぞれが責任感を身に着けて行動することにつながっている。

る。

●現世代は将来世代に対する責任を持っている

「自然学校」での取り組みと、そこに関わるメンバーの根底には、泰阜村を住みやすく素晴らしい村としてこれからも繋いでいきたいという想いがあり、その想いを大事にしながら活動を進めている実態は正に「将来世代に対する責任」があると言える。

●人は自然の一部である

「自然学校」の取り組みは、泰阜村にある豊かな自然環境と密接に関連している。その中で行うプログラムには、「人は自然の一部」という考え方が随所にちりばめられている。

●文化的な多様性を尊重する

「自然学校」のプログラムは、前述した例をはじめとして、泰阜村で日常的に行われている生活に必要な活動のみならず、村の歴史や文化を子ども達へ伝えていこうという活動が多数ある。その背景には、村人が村における様々な文化を尊重する気持ちが強く存在している。

【ESD を通じて育みたい能力】

●問題の本質を見抜く力／批判する思考力

「支援学校」で議論・討論・検討されながら進められてきたこの人材育成プログラムには、まさにこの能力を育む活動が多数存在する。「支援学校」のメンバーはこれまでの村における問題・課題について、その本質を考え、時に批判しながら自然学校での活動を行ってきた。それは自然学校での活動を通じて子ども達へも伝わっている。

●気持ちや考えを表現する能力

「自然学校」で実施されているプログラムは、自然の中で子ども達に自主性を持って活動する事が大事にされており、時には大人達がサポートするが、子ども達は気持ちや考えを自由に表現しながらプログラムで多くの学びを得ることができている。

●多様な価値観をみとめ、尊重する力

子ども達は「自然学校」のプログラムを通して、学校では学ぶことの少ない多様な経験をすることができ、地域に住む身近な大人達が活動の中で伝え

ていく事を通して、社会には多種多様な価値観が存在する事に気が付く。

また「支援学校」のメンバーも前述の通り多種多様な構成員で組織されており、関わるメンバーがお互いに価値観が違う事を認め合えるようになってきている。

●他者と協力して、ものごとを進める力

前述した例の「ツリーハウス作成」等をはじめとして、子ども達が年齢をまたいでお互いに協力してものごとを進めていくプログラムが「自然学校」に多数存在する。

●具体的な解決方法を生み出す力

前述した例の「環境美化ボランティア」をはじめとして、「自然学校」のプログラムを体験していく中で、子ども達は身近な問題・課題に対して、具体的に且つ、実践的にその解決方法を考えて行動することができるようになっていっている。

●自分が望む社会を思い描く力

この項目に関しては、私の分析が正しいか自信がないが、地域教育を地域の大人達が中心となって考え、それを子ども達へ様々な形で伝えていく中で、子ども達はその村の大人達の姿から、将来の地域社会の在り方を思い描いていくのであろうと言える。

●地域や国、地球の環境容量を理解する力

この項目も前の項目と同様に、自分たちの生活する地域の環境を考えていく活動を通じて、その延長線にある「国」や「地球」の環境へ思いを馳せていく事ができる。そしてこれは子ども達のみならず、むしろ「支援学校」のメンバーとして活動を推進している村の大人達に、グローバルな視点と考え方、様々な価値観を理解する力が芽生えていっている。

●みずから実践する力

「自然学校」のプログラムの多くは「体験型・実践型」であり、そこに参加する事はすなわち「実践力」が身に着くものと言える。

【ESDが大切にしている「学びの方法」】

●参加体験型の手法が活かされている

「自然学校」のプログラムは、前述した通り「体験型・実践型」であり、

それを伝える大人達は常にその手法について検討を重ねている。

●現実的課題に実践的に取り組んでいる

「自然学校」のプログラムを考えてきた「支援学校」は、これまで泰阜村が抱えてきた問題・課題に向き合い、実践を通してその解決を模索しながら創り上げてきた経緯がある。

●継続的な学びのプロセスがある

「自然学校」は現在 10 年の活動実績がある。同じ体験活動もあるが、それぞれの活動に付随する形で新しく活動が提案される事もある。また子ども達が自ら体験したことをその後の学びにつなげている。

●多様な立場・世代の人びとと学べる

「自然学校」は、幼児・小学生・中学生を対象としたプログラムを中心に実施されているが、そこに関わる村の大人達の年代・職種・立場は多種多様なものである。

●学習者の主体性を尊重する

「自然学校」のプログラムは、学習者である子ども達の主体性を大事にしながら活動を進めている。現在では会議の場にときに子ども達が参加していることから分かる。

●人や地域の可能性を最大限に活かしている

泰阜村という地域に存在する資源・人材を最大限活用することが、まさにこのプログラムの胆となっている。

●関わる人が互いに学びあえる

「自然学校」では、子ども達は年代を越えてお互いに協力し、学び合うプログラムを体験し、そこに関わっている大人達も、相互に学び合いながらプログラムの実施を進めてきている。

●ただ一つの正解をあらかじめ用意しない

体験活動の種類によっては「正解」に準ずるものがある場合もあるかもしれないが、答えを見つけるまでの過程や、学ぶ機会の際に子ども達を正解に導くようなやり方を自然学校のプログラムでは行っておらず、子ども達の発想や自主性に任せた活動を展開している。

以上 ESD 的な分析として項目を分けつつ記載した。泰阜村の「支援学校」が中心となり企画・検討・提案を行い、「グリーンウッド」が主体となって推進されてきたこの活動は、ESD という考え方に相当な割合で合致するものであると言える。

3. 事例 2：森でモリモリ遊び隊

① 活動の社会的背景

菅平高原は、スキー場があり「スキー。スノーボード」を楽しむ方々は以前から数多くいたが、自然体験や野外活動に対してはあまり活発ではなかった。そんな中、1996 年から森林インストラクターの養成講座開講をきっかけとして「やまぼうし自然学校（以下やまぼうしと記載）」は、自然体験活動を通して地域の仲間を増やし、連携と協働を図っていきこうとする活動から始まった。

やまぼうしができる以前、菅平高原や上田市内での体験活動は「子ども会」をはじめとした地域コミュニティが主催することが多かった。

また、地域における子ども達の受け入れという意味では、全国の小学校が実施していた「林間学校」を菅平高原では行っていたが、地域の子どもの達を対象とした自然体験に関わる事業は、当時あまり開催されていない状況であった。

② 立ち上げの経緯、きっかけ

やまぼうしが活動を始めて 8 年、2004 年度から文部科学省の事業として全国展開された「地域子ども教室推進事業」にやまぼうしも参加する事となった。

この事業は、小学校の余裕教室等を活用して、地域の多様な方々の参画を得て、子ども達と共に学習やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の取り組みを実施するという趣旨であった。具体的に何を行うかは各地域で決めて実施する形式であった。2007 年度からは「放課後子ども教室推進事業」と名前を変えて継続されたこの事業に参加する形で、やまぼうしは「森でモリモリ遊び隊（以下「遊び隊」と記載）」を実施してきた。この文部科学省の事業がきっかけとなり、菅平高原で地元の子どもの達向けにプログラム提供することになった。

③ 活動内容（活動の目的、理念、計画など含む）とその変遷

【活動の目的】

菅平高原や上田市内を中心とした地元の子どもの達へ、地元の持つ自然の

素晴らしさを知ってもらう。特にやまぼうしが重点的に活動している里山や森林保全の活動で培った経験を通して、子ども達へ山と森の良さを伝えていく事で、地域における環境教育に繋げていく狙いがある。

また、活動は小学生低学年から中学生までを対象として、参加年齢層を広く設定し、縦の学年交流を図って子ども達の対人関係スキルの向上を目指していく。

【理念】

四季の移ろいを存分に味わいながら遊んだ子ども時代の経験は、その後の生活の中での困難を乗り越える、大きな力の源になっていくはずです。森を駆け回り、道具を操り、のびやかに成長したしなやかな手足は、大きな夢をつかむ原動力になります。2011年にNPO認証10周年を迎えたやまぼうし自然学校は、「森でつながる いのちの わ」をキャッチフレーズに、上質な自然体験を通して子どもたちに生きる力を育むことを目指しています。

また、震災で自然の脅威がクローズアップされる中、豊かな自然のもつあたたかさや面白さ、不思議を一緒に見つけていく活動を続けていきたいと願っています。（やまぼうしの「遊び隊」参加者向け資料より）

この理念に基づいて、「遊び隊」事業は展開されている。

【計画】

2004年度、前述の文部科学省事業をきっかけとして、この活動はスタートをした。当初はやまぼうしの専従スタッフが中心となって年間の活動内容を検討・企画・作成しながら進める形であった。その後、やまぼうしで活動するインタープリターや、地域の方々も少しずつその計画作成から関わるようになってきている。

【活動内容】

やまぼうしが、菅平高原を中心とした地域で、子ども達の自然体験活動を地元の子供達へ提供していく企画という位置づけでこの「遊び隊」は進められている。

これまで8年間の活動を実施してきているが、今年度（2011年度）に開催された活動について、その事例紹介としていくつかの活動を以下の通り紹介したい。

●春の遊び隊キャンプ

2011年度の「遊び隊」春のキャンプは、曇りから小雨、大雨、そして晴れ

遊び隊の好奇心と同じくらい、変わりまくる天気の中のキャンプとなった。

初日はテントを張って、お弁当でエネルギーが満タンになったところで、ぽつぽつと降り出した雨。でもカラフルなカップを着た遊び隊は、沢へと駆けだす仲間、竹の道具を作り出す職人や探検家などがおり、ナイフやノコギリの使い方を伝授してもらい、アイデアが形になる楽しさを実感。夜の肝試しには雨もあがり、仲間と励まし合いながら活動を行った。

2日目は、朝4時ごろから賑やかな一日が始まった。高学年は釣りへ、低学年は朝ごはんの準備。朝ごはんの後、午前中は昨日の遊びの続きをしたり、森の探検を中心とした活動。お昼ごはんの特製肉まんやピザまんは、大好評であった。

テントや荷物の片付けも、協力しながら終了。野菜のくずはコンポストへ捨てる。釣り餌のミミズもコンポストの中から発見しました。たくさん挑戦と冒険で、子ども達はなんだかひとまわりたくましくなり、キャンプを通して様々な事を学ぶことができた。

●森遊び

「遊び隊」日帰りイベントの日。森の中へと続く丸太を渡って、道具を片手に子ども達は探検に繰り出す。内緒の落とし穴をひたすら掘ったり、新しい川をつくる子ども、どろんこ川に長靴まですっぽり入る子ども、クロサンショウウオやヤゴも発見して、みんなで大興奮の午前中。

午後の活動は、低学年から中学生までみんなで混ざって、「ドロケー」「こおり鬼」「いろ鬼」を楽しんだ。遊び隊特製のアスレチックも子ども達が自分たちの力で作り、今回も森の中でたっぷり遊び、学び、発見をした1日であった。

●遊び隊祭り

2011年度はJTとの共催で実施。参加児童の保護者・兄弟姉妹や地域からの招待客をお客様として迎え、子ども達が手作りで屋台の出店を催した。

出店した屋台は、輪投げ、射的、綿あめ屋、焼き芋屋、喫茶コーナーとなっており。和菓子屋は保護者の方々が作ってもってきてくれたお菓子等を提供。喫茶コーナーや和菓子屋は特に保護者やお手伝いの方々と一緒に活動を行った。

お昼ごはンは保護者の方々が作ったキノコ汁とシチューを子ども達は堪能した。共催企業のJTの社員の方々もお手伝いをしていただき、またJTからは子ども達の屋台に景品として飲料の差し入れをしていただいた。また菅平小中学校からイベントテントの無償貸与をいただきながら遊び隊祭りは地域

の方々と協力して大盛況のイベントとなった。

●雪の家（イグルー作り）

2011年度の「遊び隊」活動の最終回は、保護者・兄弟姉妹参加型で実施され、総勢60名を超える参加者となった。

子ども達と保護者が協力して高さ2メートルにもなるイグルーを作成に挑戦。（イグルーとはスノーソーという雪を切るためののこぎりを使って作る雪のブロックをたくさん使用したかまぐらのような家）作成の方法、安全な道具の使い方については、やまぼうしに所属するスタッフから説明と指導を受けた上で活動に入った。

お昼は持参の弁当と、やまぼうし特性お汁粉で暖まった。

午後も引き続きイグルー作りを行い、完成。イグルーの他にも雪だるまや雪像等、子ども達が相違工夫して作成した雪の芸術品ができあがった。

最後に2011年度の活動最終回につき、参加した子ども達全員に「おもしろいもの発見アンテナ性能証明書」の授与が行われた。

また折しもこの日は3月11日、東日本大震災の犠牲者に全員で1分間の黙とうをささげ、楽しく野外活動ができることに感謝する。

その後全員で写真撮影をして2011年度の「遊び隊」活動は子ども達の笑顔と保護者の方々の満足そうな顔と共に終了。

④ 運営体制の現状

【運営費（参加費）について】

文部科学省の助成金がある間については、運営や資材調達、企画作成、スタッフの謝礼等が、助成金で賄える部分が多かったため、初年度（2004年度）は無料、2005年度、2006年度が1回500円の参加費を徴収することで、イベントの実施をする事ができた。しかし、現在はやまぼうしの独自事業として主催されているので、参加児童一人あたり年間22,000円の参加費を集めて、年間での事業運営を行っている。

【スタッフと企画会議について】

「遊び隊」の年間を通した企画・及び各回の計画は、専従職員の佐藤氏が会議を開催して取りまとめている。この会議は毎月開催されている。毎年年度初めに年間計画を作成して、やまぼうしの事業計画の一つとして位置づけられている。

「遊び隊」に関わる事務作業・募集案内・参加希望者対応等をやまぼうしの専従職員が2名体制で運営している。子ども達が参加する当日の活動につ

いては、4名程度のスタッフ体制で行っている。当日について専従スタッフが足りない場合は、やまぼうしの指導者養成講座を受講して登録しているスタッフ・インタープリターに声をかけ、サポートしてもらいながら実施している。

【募集・広報等について】

「遊び隊」にこれまで参加された子ども達へ、年度が変わる時に次年度の参加案内を渡す。またやまぼうしのHPと関係者の口コミ、上田市を中心とした小学校へのチラシ配布をして広報を行っている。参加を希望する子ども達は遅くとも6月までに申し込みを行うことで、年間を通して「遊び隊」活動へ参加する事ができる。

こういった広報活動についてはやまぼうしの専従職員がその大部分を担って進めている。

⑤ 活動等を支援した地域資源（人材・組織など）

【人材】

- ・やまぼうし自然学校の専従職員
- ・やまぼうし自然学校の講座を受講して登録されている地域の指導者
- ・参加する子ども達の保護者
- ・JTの社員（2011年度については「遊び隊」と共催する形でJTがイベントを開催した。その際に「遊び隊」へもお手伝いをしてもらった）
- ・菅平高原の事業者

【組織】

- ・文部科学省（助成金）
- ・菅平高原旅館組合（「野外炊飯場」の貸与）
- ・スイスホテル（ホテル所有の「スイスの森」を活動場所に提供）
- ・ベルニナホテル（敷地内にテントスペースの提供）
- ・上田市教育委員会（後援名義付与と各小学校へ「遊び隊」のチラシを配布してくれている）
- ・上田ケーブルテレビ（活動内容を取材して放映）
- ・信州民報（取材して記事にしてくれた）
- ・JT（イベントの共催をする中で飲料や景品の提供）
- ・菅平牧場組合（キャンプ等で使用する薪材の提供）
- ・信濃毎日新聞/東信ジャーナル社/NHK長野放送局 /信越放送/NBS長野放送 abn 長野朝日放送/TSB テレビ信州/長野県教育委員会（後援名義付与）

⑥ 活動を推進するポイント

当初は文部科学省の助成金を受けて、参加費が安く抑えられた中で参加児童の数が集まっていたが、助成金事業の終了後もやまぼうしの事業として継続されてきているのは、これまでの積み上げと、常に内容を精査してより良いものにしていこうという姿勢で、やまぼうしスタッフのみならず関わるインタープリターや菅平高原地域の方々が協力してこの活動を進められていることがその最大のポイントであり、以下の通りである。

この活動は「外遊び」というキーワードで実施されており、屋内での活動は原則しない。また、同じ森で場所を決めて活動することで季節の移り変わりを子ども達に感じるプログラムを行っている。

安全対策の一つでもあるが、子ども達へは道具の使い方を身に付ける内容を必ず盛り込んでいる。刃物・火の扱い・ロープワーク等々である。

また、エネルギーの自給ということで間伐材を使ってプログラムや燃料の活用している。真田地区にある私有林（会員の紹介）から間伐材の提供を受けている。

さらに、ごみが出ないもしくはエコな範囲で活動を行い、フィールドを大切にしながら進めていくようにしている。

現在は助成金がないため、常勤スタッフや登録スタッフといった身内メンバーを活用することで経費削減を図り、赤字にならないようにしながら継続性をもたせた活動を行っている。

参加者の広報については、上田市の小学校が新学期開始後にチラシを配ってくれることで受講者が集まりやすく毎年定員（40名）の参加者が「遊び隊」へ集まってきている。

⑦ 今後の改善課題

- 遊び隊に参加した子ども達で、1年間だけ参加してその後は参加しない子ども達やその保護者との縁をきらないようなアイデアを検討している。高学年の子ども達に多い傾向で、「遊び隊」に参加した翌年以降はスポーツ少年団に参加する子どもが多く、活動日が重なり、結果参加できなくなっている。年間の参加費を集めて開催しており、中には毎年参加する子どももいるが、「遊び隊」でつないだ縁を活かしていく事が課題。やまぼうしの会員制度を「遊び隊」に参加した子どもの家族全員を登録する形にして、ほかの体験活動への参加を促す事は現在行っている。今後はスポーツ少年団との連携や協働で両方の活動に子ども達が無理なく参加できる方法を検討している。

- 活動をおこなっていく上で、プログラム内容に幅を広げたことがあり、より多様な活動を行って「遊び隊」活動のバージョンアップを図っていくために、スタッフトレーニングの充実が課題。また今後参加者が増えていくようになった際に対応するためのスタッフ確保も課題。
- 広報については毎年チラシを1万枚超える枚数配っているが40人の定員がなんとか集まる程度となっており、費用対効果が薄い現状がある。広報戦略が課題として検討されている。
- 安全対策についてはさらなる徹底を検討。過去には沢に落ちた子ども（2008年度）キャンプの際子どもがいなくなった（2011年度）火の扱いで炭が爆ぜて火傷をした子どもがいた（2009年度）と、いずれも大きな事故には至る事がなかったが、活動を行っていく際の事故がなくなるための方法を常に検討課題としている。

⑧ ESD としての分析

【ESD でつちかいたい「価値観」】

- 人間の尊厳はかけがえない
「遊び隊」の活動では参加する子ども達、スタッフそれぞれがお互いを大切にしながら活動を行っており、人間の尊厳について活動の中で学ぶ工夫がされている。
- 私たちに社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
活動の主催者はやまぼうしであるが、8年間の活動を通して地域の方々を巻き込みながらこの活動は進められており、そういった環境は公正な社会をつくるための重要な要素となっている。
- 現世代は将来世代に対する責任を持っている
この活動の主体は子ども達である。やまぼうしのスタッフをはじめとして、保護者や地域住民、行政や教育関係者が協力しながら活動を進めている実態は正に「将来世代に対する責任」があると言える。
- 人は自然の一部である
「遊び隊」の取り組みは、菅平高原にある豊かな自然環境の中で行われており、それぞれのプログラムには、「人は自然の一部」という考え方が随所にちりばめられている。

●文化的な多様性を尊重する

「遊び隊」のプログラムは、野外での活動を通じた文化についても扱っており、活動を行っていく中で子ども達が文化的な多様性を学んでいけるように工夫がされている。

【ESD を通じて育みたい能力】

●問題の本質を見抜く力／批判する思考力

「遊び隊」の活動では、そのフィールドとなる森の中で「探検」をする事が多い。そこには自然の中で多くの発見をする事で、物事の本質を見抜く力、疑問を持った事を考える力が育まれている。

●気持ちや考えを表現する能力

「遊び隊」で実施されているプログラムは、森の中で子ども達が自主性を持って活動する事が大事にされている。刃物を使う時などはスタッフがサポートする事もあるが、子ども達はそれぞれが活動の中で沸き起こる気持ちや考えを自由に表現しながら毎回の活動を楽しんでいる。

●多様な価値観をみとめ、尊重する力

子ども達は「遊び隊」のプログラムを通して、学校の授業だけでは学ぶことができない経験をする。森の中で発見した宝物をそれぞれに披露する事、活動を進めていく中でお互いに創意工夫しあう事で、多様な価値観が存在する事を知る。そして同じ活動の中で年間を通じて行う仲間同士がそれぞれに尊重しあう関係となっている。

●他者と協力して、ものごとを進める力

前述した例の「イグルー作り」等をはじめとして、子ども達と保護者やスタッフが協力してものごとを進めていくプログラムが「遊び隊」の活動には多数存在する。一人では達成できないプログラムでも、他者と協力する事で可能となることを子ども達は学んでいる。

●具体的な解決方法を生み出す力

前述した「遊び隊祭り」のように、子ども達が創意工夫して一つのイベントを作り上げる活動の中で、日常生活にもつながっていく「問題解決力」が培われている。他の活動でもその時々が発生する問題や課題について、子ども達同士が相談して解決の道筋を探している。

●自分が望む社会を思い描く力

「遊び隊」で活動する子ども達は、森の探検やキャンプ、雪の中での活動を通じて、生き方につながる経験をしている。この活動を通じて今後の社会を思い描く力が培われていると言える。

●地域や国、地球の環境容量を理解する力

「遊び隊」での活動の中で、コンポストで生ごみを活用する方法、間伐材を利用した活動等を通じて、子ども達は環境容量を理解していくための基礎を養っている。

●みずから実践する力

「遊び隊」のプログラムの多くは「体験型・実践型」である。日帰りの活動でも、宿泊キャンプでも子ども達は自分たちの意思で行動しており、みずから実践する力を身に着けている。

【ESD が大切にしている「学びの方法」】

●参加体験型の手法が活かされている

「遊び隊」のプログラムは、「体験型・実践型」であり、やまぼうしのスタッフは常にその手法について検討を重ねている。

●現実的課題に実践的に取り組んでいる

やまぼうしは「遊び隊」の活動を通じて、地域における自然体験活動の普及と、子ども達の教育という課題に実践的に取り組んでいると言える。

●継続的な学びのプロセスがある

「遊び隊」の活動は年間を通したプログラム編成を行っており、子ども達は会を重ねていく毎により多くの事を学んでいく事ができている。また、やまぼうしにとっても自然体験活動事業を展開していく上で、問題・課題等の検討や、その時々学んでいく事が多くある。

●多様な立場・世代の人びとと学べる

「遊び隊」の活動は小学校低学年から中学生までの参加者で構成された中でイベントが行われており、また時には保護者や地域の方々の協力もいただいているなかで活動が実施されており、多様な立場・世代の人々と学べる機会となっている。

●学習者の主体性を尊重する

「遊び隊」のプログラムは、主たる学習者である子ども達の主体性を大事にしながら活動を進めている。やまぼうしのスタッフ・インタープリターがサポートしながら進める時もあるが、活動の多くは都度子ども達が創意工夫して進められている。

●人や地域の可能性を最大限に活かしている

8年間の活動を通じて、菅平高原のフィールドの活用を行ってきており、また参加する子ども達は、活動を通して自分の可能性を発見し、それを支えるやまぼうしのスタッフや保護者、地域の方々も可能性を活かす場になっている。

●関わる人が互いに学びあえる

「遊び隊」では、子ども達は年代を越えてお互いに協力し、学び合うプログラムを体験している。また、保護者や地域の方々が参加して協力しながら行うイベントもあり、子どもから大人までがそれぞれに学び合える活動である。

●ただ一つの正解をあらかじめ用意しない

「遊び隊」では活動の際、基本的に参加する子ども達の自主性に任せてプログラムを実施しており、イベント毎に子ども達が学ぶことはそれぞれに異なっていて、正解を設定したものとはなっていない。

以上 ESD 的な分析として項目を分けつつ記載した。

やまぼうし自然学校が菅平地域の自然体験活動についてその活性化を図った活動は、現在では多くの人材・組織を巻き込んで子ども達の健全育成と、地域に存在する自然環境資源の有効活用に資するものに進化したと言える。このことは ESD の趣旨にかなりの割合で合致した活動であると言える。

4. 長野県の状況について

長野県は広大な自然環境を保有しており、それぞれに地域協働型の活動を行っている地域・団体は数多く存在する。

今回事例調査を行った2団体「グリーンウッド自然体験教育センター」は南信（長野県南部）、「やまぼうし自然学校」は北信（長野県北部）で地域に根差した活動を行っている団体である。この2団体は長野県内でも名前が知られており、その活動も県内の多くの地域に渡っている。

また、ボーイスカウトやガールスカウトといった活動年数の長い団体も県内各地で事業展開をしており、全国でも有数の「自然体験が盛んな県」であると

言える。

現在こういった様々な立場・分野で活動する団体同士が相互に交流・協働していく機会は少ない状況であり、今後同じ長野県という自然豊かなフィールドで活動する仲間同士が連携・協働していく場の創出が求められている。連携・協働していくことで自然豊かな長野県の資源・人材・環境がより一層有効活用されていくと考えられ、現在信州におけるネットワークの構築が模索されている。持続可能な社会と地域の推進、そのための人材育成と自然環境に配慮した活動を推進していくきっかけとして期待される。

それぞれに活動している団体が、ESD 的な視点を持っており、立場や役割、活動場所が違えども、連携・協働していくことは以て長野県、ひいては日本における持続可能な社会と環境作りに貢献するものとなる。